

2016年7月3日 主日礼拝説教（要旨）

聖書：ルカによる福音書 14 章 1～6 節

説教：「神の救いを喜ぶ日」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ある安息日のこと、主イエスがファリサイ派の議員の家に入られたところ、主イエスの目の前に水腫を患っている人がいました。主イエスは御自身の方から「安息日に病気を治すことは律法でゆるされているか、いないか」と言われ、誰も何も答えないで黙っていると、主イエスはその病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになりました。

安息日論争と言ってもよいこの種の記事は、ルカによる福音書でこれまでに何度かありました。ルカ 6 章 1～11 節では、安息日に関わる二つの出来事が記されています。一つは、安息日に弟子たちが麦畑を通りながら、麦の穂を摘み、手でもんで食べているのを、ファリサイ派のある人々が見咎めたという出来事です。主イエスは「人の子は安息日の主である」と言って反論されました。それに続いて、会堂の中で右手の萎えた人を主イエスがいやされたという出来事があります。主イエスは「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか、命を救うことか、滅ぼすことか」と人々に尋ねて、癒しの業を行っておられます。これら安息日の律法をめぐる衝突は、ファリサイ派の人々や律法学者たちの怒りを買って、主イエスに対する彼らの敵意はいよいよはっきりしていくのでした。

安息日の行動に関する主イエスの主張とユダヤ人指導者との対立は、これら二つの事件でもう十分描かれているといつてよいでしょう。それなのに、ルカはその後 13 章 10 節以下でも、主イエスが安息日に会堂で 18 年間も病のために腰の曲がったままの女性を癒された出来事を記し、ここでは水腫を患った人を癒される出来事を書くのです。それぞれの場面で語られる主イエスの言葉もよく似ています。ともかく、ルカが安息日をめぐる衝突事件を書くのはこれでもう四度目です。

ルカは医者でした。彼は安息日に主イエスが病気を癒されたことに非常に大きな関心を寄せていることがうかがえます。私たち人間を苦しめる病気に関わり、病める人間に寄り添う医者として、ルカはこれこそ主イエスのすばらしい御業であり、安息日になされるべき最もふさわしい業であったということをおうとしているのではないのでしょうか。私たちの安息とは、私たちが主イエスの御手によって、心も身体も癒され、健やかにされることにほかならないということを強調しているように思われます。

さて、今回はファリサイ派の議員の家での食事会です。おそらく会堂での礼拝を終えた後、主イエスはその場に招かれたのでしょう。どうしてこんな食事の場に水腫を患った人がいたのでしょうか。多く人は主イエスがどうなさるか、安息日なのにまた癒しの業をなさるか、罾をかけるためにわざとその人を呼んでいたのだと推測しています。しかし、ひょっとしたら主イエスが連れて来られたのではないかと推測する人もいます。会堂での礼拝を一緒に守ったあと、食事に招かれた主イエスが、その病んでいる人にも声をかけ、「あなたもついていらっしやい、一緒に食事をしよう」と誘われたのかもしれない

れないのです。

畏をかけるためか、あるいは主イエスが連れてこられたのか、どちらであったかは分かりません。しかし、確かなことは、主イエスが目の前にいるこの病める人を受け入れておられるということです。主イエスは病人の手を取り、病気を癒して帰らせなされるのです。そして人々に言われます、「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」。これまでも安息日の掟を破っているという訴えに対して主イエスが語られたのと同じ反論です。

ルカは安息日における主イエスの癒しの業を繰り返しをいとわず書きました。仕事を休んで安息日を守るのは、私たちにいのちを与えてくださった神が、私たちを生かし、私たちを救ってくださったということを覚え、喜び、分かち合うためです。安息日は神の救いを喜ぶ日なのです。その喜びこそが私たちの真の休息となります。この神の救いを思い起こすために、神に救われている事実を新たに覚えるために、私たちは休むことが求められているのです。

安息日と訳される元の言葉は「休む」ですが、それは「中断する」とか「断ち切る」という意味をもつ言葉です。仕事や勉強や家事や日々の生活の営みを中断するのです。なぜ、そんなに規則的に中断することが大切なのでしょうか。それは休みを取ることが心身に健康に必要なということにとどまらず、一步踏み込んで考えるなら、人間の仕事にいつもつきまとい離れない自己絶対化と自己義認と自己主張を止めることが求められているのではないのでしょうか。

主イエスがあえて安息日に病人を癒されたのは、安息日の律法を無視されたものではありません。主イエスは、律法の専門家やファリサイ派の人々の律法理解、そこに見られる律法に固執し、自己流に律法を厳守して、自分を誇り、自分を義とする思いから彼らを断ち切ることを、解放することが必要だと考えられたのです。彼らの安息日律法への思い込みを中断させようとされたのです。

私たちのいかに正しい主張も、どんなによい行いも、こうでなければならない、こうすべきであるという自己絶対化にまとわれるとき、それは偽善な律法主義として汚れてしまうのです。だから、私たちは繰り返し人間の業を中断し、神の前にひれ伏すことによって、神に生かされ、キリストによって罪ゆるされ、救われなければならない自分を見いだす必要があります。神から注がれたまなざしのもとに、人を見るまなざしと自分を見るまなざしをとりもどすのです。それが私たちに必要な本当の休みであり、神が私たちを招いておられる真の安息なのです。